〈特集オカマ・ニン〉

その道のドヤ

―山谷に元映画スターがいた―

釜、山谷、寿、そして川崎―

帰省場をずっと考えてみるとオカマの本場はどうしても釜ということになる。

第一、釜ヶ崎という代名の由来にオカマが出てくるのだから。

これは誰でも知っていることで、はっきりいってしまうと、オマンコよりもオカマが先＝釜ヶ崎という説

もっとも釜ヶ崎のはじめには別の説もあって、これまたよく知られている。

シノギのためには　何でもかんでも草屋へはこんでしまうが、ゼニができた時、一番ごきに受け出すのはメシを炊く釜、だから釜がサキとこうなってきたという話。

アマシイ

しかし、釜こそはまさにオカマの本場と思われているのは事実だし、その通りのような気がオレにもする。

ただ、釜にはオカマ専門のドヤはないと思われるのに、山谷へ行くと、大体専門に近いドヤがある、これが不思議だ。

山谷のどこがそんなドヤか。

もちろん、オレはドヤの名前も明らかにできる。だが、それは少し工ゲツないようで気がすすまない。ボカして書く。

それともう一つ、オレが山谷にいた時といまでは、様子がちがってくることもあるかもしれない。だから、いま現在よりはちょっと古いことを書いてるのを承知してくれないと困る。

山谷も町名が変更になってオレみたいに古いものはいいにくくなった。いま、あすこは東浅草のナンチ丁目とかいう交サ点だろう。ナミダバシじゃない方の、吉原へまっすぐ行ける方の交サ点だ。（反対に行けば玉姫の方ってことン）

その交左点近く、東通り、このウラ通りをまっすぐ行くと山谷のセンターになるけど、まっすぐなんか行かない、ウラ通りに入ってじき近いところに一軒、古いドヤがある。

ドヤときめつけるのが可哀想なくらいには、ちゃんとした造りの二階建。いつもニーニとした感じで、イモゲンは入りにくい。

以前、そこにはオカマ専の大立物が泊っていたこともある。ことによったら今もいるかも知れない。しかし、いたとしても、トシはすでに七十才前後、現役はムリだろう。

彼は戦争中、映画の二枚目だった。主演した映画も相当ある。

彼と同じ会社で、共演してたスターの名前も、オレがおぼえてるだけ並べてみるから、彼とはダレか推理してもらいたい。

山路ふみ子、美禍まり、淡島みだりへ千景ではないぞ、逢初夢子、平井岳代子、浦辺粂子、真山くみ子などがその方のスターで、男には年佐美寿、小柴幹治、若井一郎、河津清三郎なんかがいた。時代劇ではない。

ついでだからもう少し書こうか。

同じ会社の時代劇の方、京都サツエイ所のスターにはこんなのがいた。

長門光三郎、大谷

新世界の映画館に一軒、その道の好き者が集まると聞いた。浅草にもそんな映画館があった。においもするのかな。

日出夫・角保新太郎・市川男女之助・鈴木澄子・森静子・松浦妙子・高山広子・大友柳太郎・甲斐世津子――

この中で日鈴木澄子が化けネエで一番知られた存在だった。それから高山広子はタヌキものを売り出した。目のパッチリした、シャガレッ声のいい女。

鈴木澄子はとうに引退したが、アベノ旭町にスシ屋と酒場と一軒ずつ、彼女のイキのかかった店がある。

――ムダバナシはやめよう。

以上、並べあげた スターたちと同時代の現代劇二代目スターが、戦後オカマになって山谷に住んでいた。その根拠地がさっきオレのいったドヤで、そこには彼を「メメメのオネエサン」とうやまう同業の若いものが多勢泊っていた。

元スターの「メメメのオネエサン」は、住んではいたが、当時山谷では商売せず、夕方に風呂へ銭湯のモチロン男湯）へ入ると、夜サ来の向う側の美容院でかっこうつけてからどこかへ出て行くのだった。

当時、オレはちょっと彼の話をきいたことがある。

アタマのうしろの方は禿げていたが、腰のイロツヤはとてもよくて、まあ、それなりのかっこうすれば立派なものだった。

「メメメのオネエサン」という名前は、御面でも通っていたから、さすが元スターだねと感心したこともある。

それからもう一軒、ここは山谷の表通りにあるドヤだが、ここはプロでなく、アマチュアでその道の好きものがよく泊る。

三畳に二人の合部屋で何も知らずに眠っていたら、どうもムズムズと気持がよくなってきて、気がついたらトナリの男に自分のモノがさわられていたとか、もっとあからさまに口にふくまれていたとか、そんなあのよくあるドヤだ。

しかし、はじめにことわったように、いま現在のことは知らない。といってこの話、そんなに大昔のことでもないが――。

さて、ならば金にはそういうドヤは全然ないのだろうかというと、ドヤのオヤジがその道の好き者というのが一軒ある。

こいつは以前の野島の会の事務所近くで、オレ本人が金へ来たての時分に泊ったあくる朝、「すっといてくれたらタダでいいから……」なんて迫られて往生したへいや住生して向うの御希望通りになったのではない、困ったということもあるし おぼえがあるからたしかだ。しかし、あのオヤジも年中そんなことしてるわけでもなかろう。もし年中やってたら、もっと噂になるはずだ。

とにかく、釜にはたしかにオカマはいるけれど、その宿泊だけの専門店みたいなドヤの話はきかないという、ただそれだけのハナシ。

男娼の森

昭和二三年十一月二二日夜、栃木県時撃戒がはじまったばかりの東京上野公園に、時の警視総監田中栄一へのち自民党代議士）が視察に行った。

そして公園のくらやみで、夜の男たちにとりかこまれ、ハイヒールさハンドバッグでなぐられた上、帽子を奪われた。当時はまだ駅前のやケ跡やミ市時代、上野はやミ屋パンパンパンパン浮浪児とオカマの巣だった。

「男娼の森」という小説が出版されたのもこの頃で、作者は南逸せという青年だった。

この年一月、帝銀事件、六月太宰治心中、十二月東條英機他戦犯七人絞首刑。

現場にオカマがまじると面白くていい。監督のそばへ行かせておくと、こっちにくる文句が少なくなる。